

使用済みロウソクを再生し、「人権・平和・環境」に取り組む

NPO法人 燭光◎青森県・雲祥寺



使用済みロウソクを磨くお檀家さんたち

旧金木町の中心部、太宰治の生家である斜陽館から徒歩1分に位置する雲祥寺。太宰が幼い頃、子守であったタケに連れられ、よく眺めたと言われる地獄極楽の御絵掛地・十王曼荼羅があることで有名なこのお寺の境内の一角に、「NPO法人燭光」の工場がある。

使用済みロウソクを原料に、再生ロウソクを製造し販売。また、「人権・平和・環境」に取り組む団体に再生キャンダルを寄付する活動を行うこの法人が設立されたきっかけは、理事長である一戸彰晃師(雲祥寺住職)の、ある気づきだった。「お寺でよく使われるロウソクは、そのほとんどが使い切られずにゴミとして廃棄されている。また、ロウソクの原料は石油資源であるパラフィンであり、環境汚染の原因ともなる。何とかできないだろうか」

そこで、再生ロウソクを製造する機械を、懇意にしていた外崎鉄工所さんと共同開発することにしました。その開発は苦勞の連続だったという。

「そもそも、ロウソクの製造方法がわからない。再生ロウソクを手掛ける企業は日本にはなく、本当に試行錯誤の連続でした。たまたま、私どもの趣旨に賛同するあるロウソク工場の社長さんの協力で、工場を見学することができ、ようやく道が開けました。足掛け4年間かけてやっと完成にこぎつけた製造機を前に、一戸師はその苦勞を語ってくれた。



雲祥寺住職 一戸彰晃師

一戸師は、この活動を始める前から、「狭山事件を考える青森県住民の会」などの人権擁護活動や様々な住民運動に積極的に関わってきた。そんな師にとって、曹洞宗のスローガン「人権・平和・環境」はその活動の大きな指針であったという。ロウソクの再生は、その中の「環境」問題を解決するものとして取り組んできた。そして、その活動は新たな広がりを見せる。

師は以前から、日本のNPO立ち上げの契機となった「阪神・淡路大震災」に強い関心があり、また、その追悼イベントで灯されるキャンデルのやわらかな光を見て、何か協力できないものか、助け合える仕組みは作れないものかと考えていた。そんな中、関西の協力者の働きかけにより、「阪神・淡路大震災の追悼イベント」に、使用済みロウソクを使って作ったキャンダルを1000個送り届けたのだ。

「捨てられるはずだったロウソクが、沢山の人の心を温めることができたんです。また、被災地ではロウソクが明りや暖房として必要とされている。これからは国内だけでなく、ロウソクを必要としている世界中のひとたちに届けたい。再生ロウソクを通

して、人権・平和・環境全てに取り組めるように、今後さらに活動を広げていきたいんです」と師は夢を語る。

その夢の元となる使用済みロウソクは、新聞、テレビなどでの紹介を通じてNPO法人燭光の活動に共鳴した寺院などから届けられる。それを、主に梅花講に所属するお檀家さんたちが、手作業で煤(すす)を取り除く。その後、製造機の溶釜釜で熱して溶かし、芯を中心に通した型に流し込む。私も、実際に製造を体験してみたが、分単位で手順が細かく決められており、その手順を少しでも間違えると、ヒビが入ってしまい、売り物にならないという。再生ロウソクだから、と言いつつはしたくない。完成度の高いものを送り届けたい」と師の表情が引き締まる。約30分でロウソクが固まり、レバーを回すと、生まれ変わったピカピカのロウソクが機械からせりあがってくるのだが、その瞬間は鳥肌ものだ。再生ロウソクのサイズは30号、4本入りケース1スター(計48本)を八千四百円で販売している。

「使用済みロウソクは、お陰さまで沢山集まるのですが、再生ロウソクが思ったより売れないのが悩みですね笑」

法人収入の内訳は、会費収入と再生ロウソクの販売益。そして寄付金とのことだが、再生ロウソクの販売が伸び悩んでおり、原料費や法人税を支払うと収支はトントンだという。聞けば、青森県内のNPO法人の大半が安定した収益がなく、休眠状態の法人も多いという。しかしながら、



使用済みロウソクが生まれ変わる瞬間